

## 北海道内における食虫植物の群落と生態 (第三報)

外山 雅 寛

(新篠津村立新篠津小学校)

1. 静狩湿原に *Utricularia* を求めて

## (1) 静狩湿原について

静狩湿原は、北海道胆振管内の噴火湾沿岸、長万部町字静狩より八雲町字黒岩間の低地に分布する通称「長万部泥炭地」の一部である。群落的分布から見れば、ミズゴケ湿原 (*Sphagnum boscii* : Moss moor) であり、ミズゴケ (*Sphagnum* spp. = 詳細は筆者未調査)、ホロムイヌ (*Carex middendorffii* Fr. Schm.)、ツルクケモ (*Vaccinium oxycoccus* L.)、ホロムイソ (*Scheuchzeria palustris* L.)、ヤチヤナギ (*Myrica tomentosa* Aschers. et Graebn.) 等の泥炭地構成植物とモウセンゴケ (*Drosera rotundifolia* L.) 等の泥炭地随伴植物を主とする高位泥炭地である。モウセンゴケは極めて豊富で湿原のいたるところを赤く染めている。

館脇操博士の名著「北国の花」にこの湿原を紹介した文章があるので引用すると、「寂れゆくアイヌ部落を街はずれにもつ長万部附近には、かつての「天然記念物静狩の泥炭地」がある。千島列島に沿って南下した寒流親潮は、本道東部太平洋岸を洗って日高エリモ岬に、さらに西流室蘭沖を通り尚西してくる。為にこのあたりの夏の日是比较的寒冷であって、低地に高位泥炭の立派な発達を見たのである。

この泥炭原野は、生態学的に見て本道南部を代表する湿原であり、殊に浜中の沼には大小の浮島がある。これ等浮島は高位泥炭型をとって島上のガンコウラン、ヒメジャクナゲ、ホロムイイチゴ等を生じ、最大の島の流動位置によって浜辺の人達はイカ漁の予測をしていた。」と記されている。位置は第1図に示した。

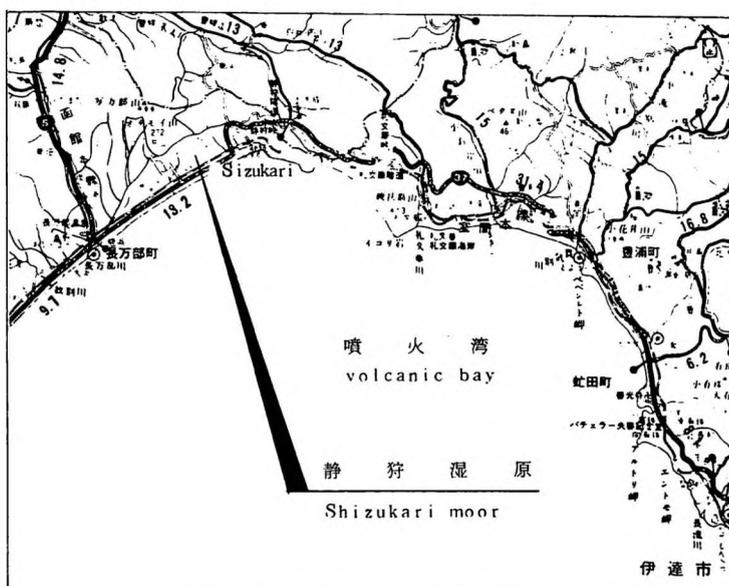
(2) 静狩湿原より *Utricularia uliginosa* を再確認

静狩湿原からのムラサキミミカキグサ *Utricularia uliginosa* の植生記録は1951年館脇操博士によるものが最後であり、その後の記録が全くなくムラサキミミカキグサはもう道内からは絶滅したかに考えられていたものである。

全国の研究機関の標本庫を調査の上まとめられた「日本歯科大学紀要」第9号 (Komiyama and Shibata: Distribution of the Lentibulariaceae in Japan) によると北海道からの正確な記録として次のように記されている。

Nom. Jap. : *Murasakimimikakigusa* (Matsumura 1884)

Hab. : HOKKAIDO : Urausu, Sunagawa C., Kawakami SAP (1890); Ebetsu C., Tashiro SAP (1891), TI (1891); Sapporo C., Faurie KYO - 3063 (1888); Shizukari, Oshamanbe T., Tatewaki SAP - 42241 (1951)



第1図 静狩湿原位置図



第2図 一世紀前の新篠津湿原の広がりを示す図

以上より北海道からの最後の記録が館脇博士による静狩産ムラサキミミカグサであることはまちがいない。

しかし、静狩湿原は石狩管内の新篠津湿原に比較すればはるかに水量の豊富な湿原であり、自生の可能性を大いに期待していた湿原で、むしろ「生きていてほしい!!」という願いでいっぱいであった。

北方山草会のメンバー数人で昨年静狩湿原の踏査旅行を計画していたが残念ながら雨のために中止のままとなっていた。実に待ちどおしい踏査旅行であったが今年再び計画し、7月14日ニセコ町「東山プリンスホテル」で1泊、翌15日に踏査を決行した。

最初にメンバーの1人大宮不二雄氏が湿原に入ったとたんいきなりムラサキミミカグサを発見した。実に感激的な場面であった。33年振りの再確認である。一口に静狩湿原といっても広大な原野である。しかし、われわれの踏査はあまりにも恵まれていた。ふみ込んだ場所は「はげたみそ状の泥炭地」が広々と散在し、ムラサキミミカグサの大群落(実に規模が大きい)がどこまでも続いているという状態である。自生地はやはり予測したように、他の植物があまり入り込めない「はげた泥炭地」であった。

2時間という極めて制約された時間しかないので、植

生状況の代表的なタイプを次々とカメラにおさめることにした。カメラ故障のためフィルム1本に光が入り込んでしまったことは、かえすがえすも残念なことであったが、静狩湿原と新篠津湿原におけるムラサキミミカグサの植生状況比較のための十分な資料を持ち帰られたことは幸いであった。

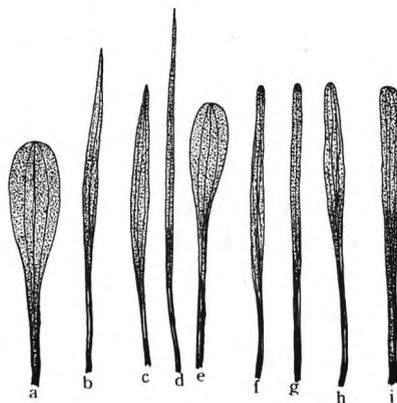
## 2 新篠津及び静狩両湿原におけるムラサキミミカグサの群落と生態

### (1) 両湿原の規模

第2図は北海道庁第二部刊行の「北海道農業手引草」所収の「石狩国殖民地之図」(明治22年)で、この資料によって1世紀前の湿地の広がりがいかに広大なものであったかを知ることができる。地図中の「上当別」は現在の新篠津村に当たっている。(点を打ったかこみは当時の湿地を示したものである)

しかし、現在の「新篠津湿原」は旧第五小学校の前方にはんのわずか残された至って小規模な乾燥化の進行している湿原に過ぎず、経営面積で日本一を誇る大規模な水田農業開発はその代償としてかけがえのない生きた自然教育の場を失いつつある。

これに対して静狩湿原は比較にならないほど広大な面積を有し、開発の手が加えられているとはいえほとんど原始のままの姿を横たえている。水量も非常に豊かで各種の水生植物群落もみごとに保全されている。



第3図 北海道長万部町「静狩湿原」産ムラサキミミカグサの葉の諸形態(拡大図)

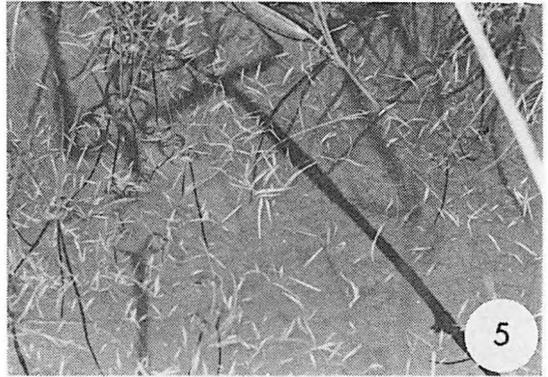


第4図 モウセンゴケムラサキミミカキグサ群落の典型的なパターン

(2) 新篠津及び静狩湿原のムラサキミミカキグサ  
 今回決行した静狩湿原の踏査目的は、かつてここから記録のあったムラサキミミカキグサの植生を再確認することが1つと、第2のねらいは筆者が「水草研究会報」No.15 (1984) (「北海道内における食虫植物の群落と生態」) で新篠津産ミミカキグサ類は沈水植物underwater plantsであるとの報告をしたが、このことが北海道内の他の地方でもあてはまるかを確認することであった。以下ムラサキミミカキグサ群落について観察し得た代表的な群落パターンをできるだけ沢山撮影した写真を基にして報告したい。

多数の写真を総合して見た結果では、ここ静狩湿原でもやはりunderwater plantsである。そればかりではなく、今は乾燥化している新篠津湿原がそのむかしどのような様相をなしていたのかを推定するためにも静狩湿原踏査旅行は貴重な資料をわれわれに提供してくれた。

特に驚いたことは、沈水状態のムラサキミミカキグサの群落が非常に多く見られたことである。そこでは大部分の図譜類が示しているような「へら形の標準葉」はほとんど見ることが少なく、倒皮針形、線形、鋭先頭の線形葉を示す場合がほとんどで、葉も長いものが目立った。ただし、水量がごく少ない所では典型的な「へら形」を確認することができた。

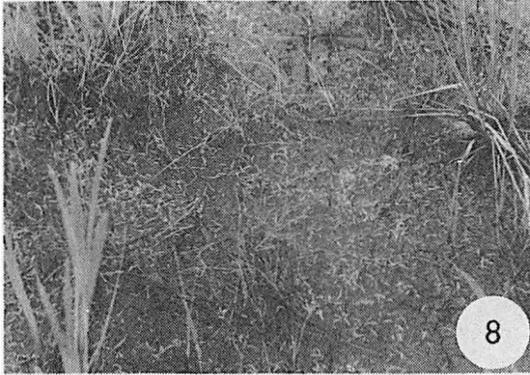


第5図 沈水状態のムラサキミミカキグサ

第6図 小凹地のムラサキミミカキグサ群落

第7図 沈水状態のムラサキミミカキグサ

第3図は、北海道長万部町「静狩湿原」より採取のムラサキミミカキグサの生体からの葉を写生したものである。a・e typeの標準葉形はここ静狩ではまれで、b・c・d typeのように先端部が鋭先頭をなすもの、または、f・g・hのようにほぼ線形で先端部が鈍頭なtypeがほとんどといってよい。葉形は、水量による影響が最も大きいようで、石狩郡「新篠津湿原」では長万部湿原とは



第8図 ムラサキミカキグサ群落小凹地をはいまわる

第9図 水量が比較的少ない泥炭土で見られるムラサキミカキグサの群落

逆に水量が少ないためにa・e type (へら形標準葉) をなす場合がほとんどで、葉長も6 mm程度である。

b・c・d type及びf・g・h・i typeは水量豊富な自生地に見られるtypeで、特に沈水状態のムラサキミカキグサの場合は、b・c・d typeがほとんどで葉長も長く1-3 cm、あるいはそれを越える個体さえ見られる。

図4は、モウセンゴケ-ムラサキミカキグサ群落の典型的なパターンである。針葉で鋭先頭の葉が目立っており、水量が比較的豊富な他の植物が入り込めないような「みそ状泥炭土」に自生している。

第5図は完全に沈水状態のムラサキミカキグサの大群落の一部分を撮影したものである。図譜等に示されている葉形とは全く異なっている(他の植物はほとんど入り込めないでいる。b・c・d typeや先端鈍頭のf・g・h typeの葉形が多く認められる。)土質は植物体の残存組織がほとんど認められないような土で、一般的にいう



第10図 ミズゴケ群落の近くあるいはミズゴケの堆積により生成された小凹地に見られるムラサキミカキグサ群落



第11図 ヤチスギラン-モウセンゴケ群落に見られるムラサキミカキグサ群落

泥炭土 (peaty soils) と異なり、より正確には土壌学上でいうところの「黒泥土」に合致している。

第6図は少し趣きの異なったムラサキミミカキグサの大群落で、小凹地 (hollow) にほぼ沈水寸前の状態で自生しているパターンである。左右の小隆起 (hummock) にはミズゴケ類は全く認められていない。小隆起生成に関与している植物については未同定のため、機会を見てもう一度現地を訪れてその詳細を調査したいと思っている。興味深い群落パターンである。

第7図版は小池 (small pond) に自生するムラサキミミカキグサの群落地で、この植物が水草であり、しかも、北海道では水量の豊富な場所を好む植物であることを物語る貴重な写真の一葉でもある。浅部では「標準タイプのへら形葉」が見られるが、個体数が少なく、ミツガシワの後方の深部に沈水状態のムラサキミミカキグサの個体が多数見られる。(はげた泥炭地ではかの植物はなかなか入り込むことのできない環境状態である。モウセンゴケはいたる所に自生し、湿原全体を赤色に染めている。)

第8図版は、小凹地をはいまわる大群落を示したものである。水量は非常に豊富である。それに対して第9図版は比較的水量不足の泥炭土に自生するムラサキミミカキグサ単独の群落であり、こういう所には例外なく a type または、e type の「標準へら形葉」を見ることが出来る。

第10図は極めて異例の場合であり、ほとんどの場合ミズゴケ群落の中、またはその周辺部にムラサキミミカキグサの群落を見ることはない。これを新篠津湿原を例にあげてみると過去3年間100回以上の調査にもかかわらず、そのような例を見出し得なかった。第10図-Aは

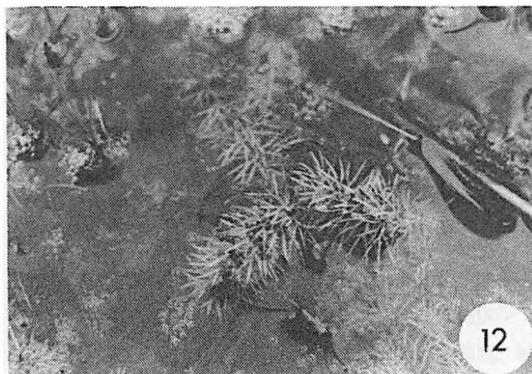
ミズゴケ群落の周辺にわずかに認められた極小群落であり、第10図-Bは左右のミズゴケ堆積によって生成された小隆起にはさまれた形の小凹地の中の群落である。この小凹地の中には既にミズゴケ一種名は筆者未同定一が侵入してきている。この場面はやがてはミズゴケのみの群落に変わっていく一つの変遷過程を示したものと推定している。写真で見ると、ムラサキミミカキグサ群落がミズゴケ群落の中で極めて圧迫された形で植生していることと、新篠津湿原ではミズゴケ群落の中にムラサキミミカキグサ群落を見出し得ないからである。また、北海道のような寒地では、ミズゴケの勢力が非常に強いようにも思われる。いずれにしても第10図版のA-Bは北海道では極めて貴重な写真資料のように思われる。

第11図は、ヤチスギラン-モウセンゴケ群落の中に見られるムラサキミミカキグサ群落で、これと同じパターンの群落は規模こそ極めて小さいが新篠津湿原においても1例発見している。

### 3 静狩湿原より再確認の他の *Utricularia* 二種の記録

今回の踏査で再確認できたタヌキモ類はヒメタヌキモ *U. minor* 及びコタヌキモ *U. intermedia* の2種であるが、先に記録のモウセンゴケやムラサキミミカキグサを含めると過去において静狩湿原で記録されたことのある食虫植物は全て現存植生し、しかも、極めてよく保全され、ほとんど原始のままの状態を保ち、現状から見て今後とも長い間道南部を代表する立派な湿原としての位置を誇るであろうと思われる。

参考までに上記2種の静狩湿原での記録を示すと下記



第12図 静狩産コタヌキモ



第13図 タヌキモとヤチコタヌキモ

の通りである。

<U. minorの過去の記録>

Shizukari, Oshamanbe T., Tatewaki (館脇操博士)  
SAP-42244L (1951) . . . その後の記録は現在まで絶えていた。今回の記録は33年振りの記録である。

<U. intermediaの記録>

Shizukari, Oshamanbe T., Makino (牧野富太郎博士) MAK-2484 (1903) Kudo and Yoshii (工藤祐舜及び吉井義次博士) TAI-8227 (1921) Koizumi and Tatewaki (小泉秀雄及び館脇操博士) TAI-8393 (1922), Tatewaki (館脇操博士) SAP-42244R (1951).

以上、コタヌキモの記録は牧野富太郎博士の明治36年の記録を最初とし、館脇操博士の1951年の記録を最後とし、これも同じく当湿原からの記録は33年振りである。

以上過去の記録は全国の研究機関の植物標本庫の資料に基づいてまとめられた Distribution of the Lentibulariaceae in Japan (1980) によったものである。

図版12は今回再確認できた静産産のコタヌキモである。

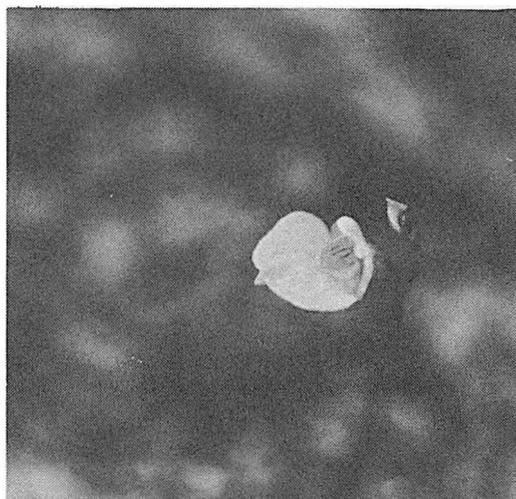
<追 録>

なお、今年6月新篠津湿原よりさらにタヌキモ U. austraris を再確認、ヤチコタヌキモ U. intermedia form. ochroleuca を新分布として確認したので記録しておきたい。

第13図は新篠津産タヌキモとヤチコタヌキモの混生している状態で、14図はヤチコタヌキモの花である(6月中旬開花であった)。

この調査を執行するに当って多くの方々に大変御援助をいただいた。日本歯科大学の小宮定志教授からは文献の御送付を受けただけでなく、タヌキモ類の同定について詳細にわたる御教示をいただいた。北方山草会の高野英二氏、大宮不二雄氏にはこの踏査旅行についての計画立てに全面的な御協力を受け、静産湿原への道案内までしていただいたおかげでかつてこの湿原で記録された食虫植物の全種をわずか2時間で再確認することができた。

さらに、宿泊については北方山草会に新しく入会された東山プリンスホテル支配人の大井さんにはわれわれ一同に対し、特別優待され、身にあまる快適な一夜を過ごさせていただいたりした。



第14図 ヤチコタヌキモの花

以上の方々に改めてこの紙面をかりて感謝の意を表すとともに、北海道の湿原がいつまでも原始の姿のままであってほしいと願いたい。

<参考文献・引用文献>

- ① 小宮・柴田 (1980) : 日本歯科大学紀要第9号 (Distribution of the Lentibulariaceae in Japan)
- ② 館脇操 : 北国の花
- ③ 北海道庁第二部 (1889) : 「北海道農業手引草」所収「石狩国殖民地之図」
- ④ 外山雅寛 (1983) : 「北海道内における食虫植物の群落と生態」第1報 (水草研究会会報No14)
- ⑤ 外山雅寛 (1984) : 「北海道内における食虫植物の群落と生態」第2報 (水草研究会会報No15)
- ⑥ 外山雅寛 (1983) : 「ムラサキミミカキグサの自生地」(「北方山草」第4号)
- ⑦ 外山雅寛 (未刊) : 「北海道の湿原と幻の熱帯性食虫植物の現存植生について」(「北方山草」第5号原稿による)
- ⑧ 小宮定志 (1980) : 「日本産タヌキモ科植物の学名について」(「食虫植物研究会誌」91号)
- ⑨ 浦上啓太郎・市村三郎 (1937) : 「泥炭地の特性と其の農業」(「北海道農事試験場報」第60号)
- ⑩ 宮部金吾 (1935) : 「北海道のフロラに就いて」(「日本学術協会報告第10巻4号」)